武田泰淳『審判』論

――人間の自覚を求める心――

白　蓉

一

戦後派作家武田泰淳は一生深く根付く「恥じらい」に苛まれた。戦争中の一九四三年四月に出版された評論『司馬遷――史記の世界――』で、彼は〈司馬遷は生き恥さらした男である〉という高名な一行で書き始めている。

泰淳のこの「恥じらい」の原点を追いつめると、彼の幼い時の生い立ち――僧侶の子として生まれ育ち、人を救えることを何一つしていないにもかかわらず、世襲制度で僧籍を得て生業としていたことや、学生時代に左翼運動に参加しながらも正真正銘の「革命者」になりきれず、いとも簡単に組織から離脱したことなどとつながる。しかし、その負い目ともっとも直接なつながりとなったのは、やはり中国文学の研究を生涯の仕事に選びながら、愛する中国と中国人に一兵士として刃を向けたという屈辱感と良心の呵責であろう。

日中国交回復の翌年、一九七三年の堀田善衛との対談「私はもう中国を語らない」での発言から、泰淳の負った戦争の傷跡の深さ、惨憺たる罪責感を察知することができる。

ぼくの場合はだね、中国に対してひとつもいいことをやったことがないやね。いくら中国人がそうでないといってくれてもね、ぼくは害を与えたことはあっても、益を与えたことはない。それは歴然たることで、しかも、ことは取り返しのつかないことなんだ。（中略）だから、ぼくの地獄であり、極楽であるわけで、地獄往きにせよ極楽往きにせよ、最後の瞬間は、中国の方角からやって来ると思うんだ。[1]

周知のように、武田泰淳に決定的な衝撃を与えたのは、二度にわたる中国渡航での経験である。一度目は一九三七年十月から三十九年十月までの二年間の間、一兵士として日中戦争に加わった兵役体験である。〈戦争を離れては私の作品は一つも成立し得なかったであろう〉[2]、〈ぼくに物を考えるという癖がついたのは、この戦地体験がはじめてだった。が、軍隊体験がぼくに与えたもっとも

大きなものは、人間と社会に対して、初めてぼくの目を開いてくれたことだ〉[3]と泰淳自身が語っているように、この二年間の兵役体験は、氏の人生にも、文学生命にも烙印を押し、多大な影響を与えた。

二度目は一九四四年六月に徴用のがれの意味もあって、氏は再び上海に渡り、日本政府の出先機関である「中日文化協会」に就職し、国策に順応し、国民精神を奮い立たせる書物を出版することを目的とされていた。四十四年に上海で日本の敗戦を迎え、その翌年の一九四六年の四月に引き揚げ船で帰国するといった敗戦体験である。

この敗戦体験について、〈ぼくは実際上海でもって、こんどの敗戦を迎えなければ、おそらく小説を書こうとしても、書く意味をくっつけることができなかったと思う〉[4]と泰淳が明言している。このように、中国での戦争体験と敗戦体験は、武田泰淳が戦後派作家として誕生するための重要な転機となったことがわかる。氏はそこに自分のほとんどすべてを重ね合わせて生き、そしてそこに思想と文学の原点を置こうとしたのである。

武田泰淳のこうした途轍もない罪障感と自尊の破壊に生きる体験は、戦後の日本文学者に共通するものと見られる。同じ戦後派作家の野間宏が、「未来の光にてらして」という文章の中でこのように述べている。

その傷跡はなおいまも自分の中に深くのこっているが、私達の文学の出発点となったものは、この戦争の傷跡とよばれるものであった。[5]

野間宏もまたその戦争の傷痕を訴えるように、戦後派作家の第一声として、『暗い絵』を書き、文学の出発としたのである。

日本の戦後は戦争の記憶を忘却することからはじまったのだが、戦後派作家は戦争の記憶を追憶の彼方に追いやるのではなく、それを思想と文学の原点として、生きていくための課題として、新しい観念で戦後という時代に小説を書いていく方法を模索していくのであった。そここそ戦後文学の魅力のところである。

ところが、戦争体験、敗戦体験は日本の戦後作家に見られる著しい共通点であるが、武田泰淳の戦争体験自身に独自性があり、それがまた氏の文学の独自性にもつながる。武田泰淳には他の戦後派作家になかった「日中戦争」に侵略の一尖兵として参加するという特異な体験があったのである。それが大きな原因で、戦後文学者の中で、武田泰淳ほど戦争に加わったという犯罪的な後ろめたさ、罪意識の強い作家は稀である。また彼ほど自分の〈生き恥をさらし〉てまで、その罪業感を見事に文学のエネルギーに化した作家も稀であろう。

一九四六年四月に帰国した泰淳は奔走するように司馬遷的出発点から矢継ぎ早に作品を発表し、『審判』も氏が〈生き恥をさらし〉ながら書き上げた作品の一つである。

〈あれはまあ、戦争の一番の結論だよね〉[6]と泰淳が述懐しているように、『審判』は武田泰淳の戦場体験と敗戦体験をもっとも深刻に反映している作品であり、帰国した泰淳が拭いがたい罪意識に苛まれたすえ、全身全霊で書いた作品であると思われる。拙論

では、この作品を分析することを通して、戦争体験は武田泰淳の文学にどう血肉化していったのか、武田文学の独自性を追求することを目的とする。また、泰淳が生涯をかけて見つめ続け、問い続けた極限状況における人間の弱さと良心の不確かさ、及び人間の善悪の問題、自覚の問題を究明し、氏のわれわれへの示唆を得てみたいと思う。

二

『審判』は一九四七年四月号の雑誌「批評」に発表された。この作品は本格的に作家を志した泰淳が、敗戦後に初めて発表した意欲作である。

『審判』は大きく二つの部分に分けられ、前半部は主人公の一人「杉」の〈私は終戦後の上海であった不幸な一青年の物語をしようと思う〉という語りをプロローグとしている。この杉の視点から敗戦を境にして、昨日までの支配者が敗北の民に逆転した上海居留の日本人の生活風景と〈世界中から罪人として定められ〉、〈漂白の民〉になったという焦燥と鬱屈の心境が描写される。それと同時に、杉は引き立て役として、もう一人の主人公二郎の不可解な言論と行動を描く。後半部では、「二郎の手紙」と題して、二郎の視点から描写され、手紙を読むことによって、いままでの杉、そして読者の二郎に対する疑問が解かれていく。

この上海で中国語の代書をして生業としていた「杉」は同じ時期に上海で代書屋をして喰いつないでいた武田泰淳に近い存在と思われる。

日本軍の占領地であった上海で暮らし、帝国臣民として権力のかげで生きてきた杉は、敗戦によって、〈亡国の民の運命が今や自分の運命となったのだという激しい感情に日夜つつ〉まれ、〈沈んだ気持ちで聖書など〉を読んでいた。彼はこの亡国の民――日本人としての自分の運命を聖書のヨハネの「黙示録」に重ね合わせていた。

〈その恐怖『黙示録の破滅の状況の恐怖』にくらべれば日本人の眼前にする現実はまだまだたいしたことないのだと自分に言いきかせ、苦しまぎれのなぐさめの種にしている〉杉と同じように、上海で歴史の変貌に立ちあっていた泰淳もバイブルの「黙示録」の世界破滅のくだりを読むことで、自分を落ちつかせようとしたのである。

……ぼくはそのとき聖書の黙示録を読んだ。人間の破滅の状態はここまで行くと聖書にさえ書かれている。それに比べればまだわれわれの全滅は気が楽なのじゃないかと思って安心した。人間の社会にあっては、どこか滅びなければどこか栄えないのだから。[7]

ここでの滅亡論は、以下にあげる『審判』の中の〈ユダヤ系ドイツ人と結婚した友人〉に語らせている「エネルギー不滅論」とは繋がりのあるものである。

（前略）日本が亡びるということはちっともおどろくにあた

らんのさ。日本やドイツが亡びようと、人類全体のエネルギーは微動だにしない、不変なのさ。（中略）箇々の国々の滅亡はむしろ世界にとって栄養作用でね、それを吸収して人類全体の存続が保証されているようなもんなんだからな。

しかし、この〈滅亡観念〉の誕生について、泰淳は「滅亡について」のはじめに、

このような思いにとらわれたがるのは、もとより終戦が敗戦であり、戦争停止がそのまま敗戦のどんづまりであった日本の現実に、おそれをなした私の精神薄弱のいたすところにはちがいないけれども、やはり「滅亡」という文字に心がひかれ、卑劣であり、懦弱であるとは知りつつ、麻酔薬でも服用するように、この二字を胸に浮かべて、そこから物を考えるくせが、少しずつ習慣と化している。[8]

と語り、そういう自分をいろんな面で他人に負けていながら、やさしく声をかけてくれた人にソッポをむけ、〈歯をくいしばりながら「チェッ」と舌打ちするだけ〉のあわれな小学生とたとえ、〈滅亡を考えるとは、おそらくは、この種のみじめな舌打ちにすぎぬのであろう〉と自己嘲笑をしている。

こういったところから、ここにおける氏の滅亡観念は、敗戦から与えられた屈辱や罪意識を和らげ、紛らわすための鎮痛剤であることがわかる。古林尚氏は泰淳のこのような心の動きを〈居直り精神〉と読んでいる。[9]

このような〈居直り精神〉は『審判』の主人公杉の中でも生きている。彼は友人の〈エネルギー不滅説〉を聴いて、〈その説明で少し肩のこりがとれたような気がした〉のである。しかし、泰淳にとっては、この滅亡観念は萎えた気持ちを一時的に居直らせてくれる〈麻酔薬〉のみに止まらなかった。それは、〈日本が滅びるのはたいしたことじゃない〉という滅亡観念に対して、〈それで万事解決できるでしょうか〉と疑問を抱いたもう一人の主人公――二郎の身において表れている。それでは、〈日本が亡びる場合、いや亡びる亡びないにかかわらず、自分だけが持っている特別ななやみのようなもの〉に執拗にこだわっている二郎の〈特別ななやみのようなもの〉はどのようなものであろうか。

三

二郎は杉の知り合いである老教師の戦場から帰ってきた息子である。〈物腰のおちついた、大人びた若者〉であり、杉にとっては〈立派すぎて意外なほど〉であった。そして、二郎には、〈実に美しい〉婚約者鈴子がおり、杉の目には彼は〈恵まれすぎている〉ように映った。二郎は現地復員でありながら、意外にも〈敗戦についての感想をほとんどのべ〉ようとしなかった。その〈若者らしくもない無関心さ〉を示し、〈本心らしいものを吐露しよう〉としない二郎を杉は異様に思った。しかし、その後、杉が二郎に最後の審判の破滅について話してみると、二郎は日本の最後の審判よりも、〈その一人一人が平等に罰を受ける〉のかどうか

にこだわり、〈僕自身、裁きということばかり考えている〉と話した言葉から、〈二郎は決して子供らしい無頓着で暮らしているのではない〉と知った。

敗戦後の二ヶ月ぐらい経ち、中国語の代書商売が案外繁盛した杉は、次第に〈最後の審判のあの怖るべき絶滅の炎の下に、案外涼しい空間が残っているとすれば、それを利用してあいもかわらずケチな生存をつづけてもいいのではないか〉と思うようにいたる。しかし、〈俺はこの頃、深刻な絶望なんか消えちまったな。自分でもいやなんだけどね、けっこう楽しんでばかりいるよ〉とふてぶてしくなった杉とは逆に、二郎は〈僕はかえってこの頃の方が、まじめに考えるようになりましたよ〉と言う。

同じ異国で敗戦を迎えた〈漂白の民〉同志だが、〈滅亡の観念〉という〈苦しまぎれのなぐさめの種〉によって、杉の苦しみが次第に緩和しているのに対して、二郎の苦悩は深刻に極まったのである。そして、翌年の二月になって、二郎は鈴子との婚約を解消し、杉に一通の手紙をあて、自分は中国に留まると告げる。

二郎の手紙によると、彼は中国で少なくとも二回にわたって全く必要のない殺人行為を行った。最初の殺人は集団的な殺人で、中国の安徽省と思われるA省の田舎町で、何の罪もない、たまたま通りかかった二人の中国人農夫を射殺したのである。分隊長の射殺命令から逃れられるはずの二郎は、射つか射たないかと迷っていた次の瞬間、〈人を殺すことがなぜいけないのか〉という恐ろしい考えがひらめき、〈真空の状態のような、鉛のように無神経〉に陥り、〈およそ思考らしいものはすべて消え〉てしまった状態の中で発射してしまう。二郎は〈自分の弾丸がたしかに一人の肉体を貫いている〉と感じたが、〈部隊の移動、連日連夜の仕事の疲れなどで〉人を殺したことさえすっかり記憶から消えてしまった。

二回目の殺人は、集団的ではなく、自ら進んで、何の敵意も示さなかったまったく無防備の盲目の老夫を聾の老妻の前で殺したのである。彼はまた農夫を殺した時と同じような〈真空状態〉に見舞われ、誘惑に魅せられたように銃の引金を引いた。終戦まで、自分のこの殺人行為を真剣に思い出すひまもなく、殺した老人の顔も覚えていないという。

いままで、この二郎という主人公は泰淳本人ではないか、二郎の殺人は同じく日中戦争に従軍していた泰淳自身の明かされていない秘密ではないかとさまざまに論じられてきた。その中で、具体的な例をあげ、二郎と泰淳の類似点を指摘しているのは伊藤博子氏である。

伊藤氏は手紙に綴られている二郎の戦争に対する事実認識や、二郎の従軍経歴が、後年泰淳自身が随筆などでしばしば語られている内容と〈全くといってよいほど一致〉していると指摘し、〈殺人という不明の一点を措けば、二郎は泰淳自身の十年前の姿の投影であるといってよい〉[10]との結論に至る。

伊藤氏の精緻な分析に同感を覚えるが、ここでいくつか補充させていただきたい。

一つは椎名麟三氏との対談「救いと文学」で、〈武田さんが殺人をテーマにするようになったのは、どういうことからですか〉との質問に対して、泰淳は〈それはやはり語りたくないですね。もしそれを語るというからにはね、それに対して自分がどういうふうにするかということが決まらなければ語れない〉[11]と述べているところに目が引かれる。また、「二十年後の戦後派」との座談会で、自分の戦後の文学的出発に言及する時に、泰淳は以下のように切々と語っている。

やっぱり戦争に行ってはじめて人間の瞬間的な決意の重大さがわかった。どうするかということは自分が全責任をもたなければならぬ。銃さえ持っていればどうすることもできる。自分がどうすればいいかということは自分で決定できる。決定したとき、そのあとどうなるかということもあるし、それはどういうふうに保障されるか、あるいは隠されて永久に出ないかということもある。[12]

泰淳が戦場でそういった瞬間的な決意に迫られたことがあったのか、戦争で語りにくい、語りたくない、秘密にしたい、永久に出てほしくない遭遇でもあったのか。ここで述べていることは、二郎の殺人行為は泰淳の秘密であるか否かを判断するための重要な手がかりになると思う。

四

二郎の殺人は二度とも戦闘で義務づけられている殺人ではない。殺すか殺されるかという選択も迫られていない。彼の殺人は〈個人の殺人〉であり、彼が〈敢えてした〉〈全く不必要〉で無意味な殺人である。しかし、自分の殺人に対して、二郎は〈自分を残忍な人間だとは思〉っていなかった。ただ〈それを敢えてした特別な人間だという気持ちだけ〉がしたという。無抵抗な人を殺したにも関わらず、罪意識に全然襲われなかった二郎の人間らしい感情が麻痺状態に陥っていたのである。

法律の力も神の裁きも全く通用しない場所、ただただ暴力だけが支配する場所です。やりたいだけのことをやらかし、責任は何もありません。この場所では自分がその気になりさえすれば、殺人という普通ならばそばへもよれない行為が、すぐ行われてしまうのです。

と二郎が手紙で述べているように、戦地という極限状況における人間の人格は解体の危機に陥り、戦場に立ったことのない人間にはどうしても呑み込めないものがある。

二郎の殺人は二度とも〈真空状態、鉛のように無神経な状態〉の中で行われた。この〈無神経な状態〉はつまり自暴自棄的な状態であり、人間の理性などで操縦できない状態である。また、最初の殺人を犯すとき、二郎の頭脳を掠めたのは〈人を殺すことがなぜいけないのか〉という荒唐無稽の考えである。戦場においては、善と悪、正と不正などの道徳基準が徹底的に崩壊し、人間の良心、理性というものはいかに軟弱なものであるかがここで余す

ことなく露呈している。

後に二郎が〈今でこそ後悔している。二度とはしまいと思っている。しかしそれは法律の裁きもあり、罰の存在する社会にいるからのことでね。また同じような状態に置かれたとき、僕がそれをやらないとは保証できないだからね〉と婚約者の鈴子に告げる。この二郎の告白に対して、根岸隆尾氏は〈限界状況における人間存在のあり方を根源から浮き彫りにしていて深く重い〉[12]と評価している。

後年、泰淳が〈戦地での二年間、学校生活では得られない人間学をまなんだ〉と繰り返して言う。その人間学とは、〈時と場合で、人間は何をやらかすかわからないということ。善人も悪をなしうること〉[14]であり、〈人間の悪というものははかり知れないもの〉[15]である。

ところが、泰淳がここで提示している人間の不確かさ、悪への無限な可能性は戦争という極限状況だけに限っていない。二郎のきわめて無意味で無感覚な状態で進行した殺人行為は一見平和な現代風景の中でも行われているのであり、現代に生きるわれわれのあり方にも関わっている。そのありようは、泰淳が「無感覚のボタン」で取り上げている近代的な無感覚な殺人に見られる。

被害者をえらばぬこと、人数に無関心なこと、殺人の無意味さを問題にせぬこと、何気なくなしうること、これらの犯行のたやすさ、この犯人の無感覚状態は我々に何を教えるのであろうか。[16]

と問いかけている泰淳はわれわれに現代における大きな問題意識を投げかけ、今日の日本、あるいは世界を予告しているように思えて止まない。

昨年の末から今年にかけて、テレビや新聞でも取り上げきれないぐらいの数々の不可解な事件、四年前に起きたまだ記憶に新しいオウム真理教サリン事件、そして一昨年の七月に日本全土を震撼させた神戸中学生殺人事件などはまさにこの現代的な無感覚、無関係、無差別な殺人である。

なぜ二郎、そして少年は、復讐も憎悪の念もなく、殺さなければ殺されるという切羽詰まった状態に置かれていなかったにも関わらず殺人を行ってしまったのだろうか。「殺しが愉快でたまらない」、「人の死を見たくて見たくてしょうがない」と少年が揚言しているように、殺人が楽しかったからである。現実生活に対する無感覚、無聊感から逃れたい、一時的な快楽を得たい、〈もとの私でなくなって〉みたいという衝動が彼等を動かし、殺人行為に至らせたと思われる。無意識的な現実逃避である。そして二郎を含む多くの兵士たちが、軍隊内において抑圧され、鬱屈された感情を残忍行為として発散していたように、少年も人を殺すことによって、アンニュイという苦しい状態から抜けだし、学校や社会に対する自分の鬱憤を晴らそうとしたのである。このような方法でしか快楽を得られない、己の実存を確かめられないというような人間性が変質している子供たちを取り囲んでいる社会は、異常としか言いようがない。彼等の自己実存感覚の欠如は人間不信、社会不信によるものと考えられる。己の存在にさえ実感を持てな

くなり、感覚の麻痺状態に陥っている者に、他者の存在も無意味なのであり、命の尊さと重さに対する思慮もとりわけ稀薄なものである。このような殺人は殺す相手を選ばない、誰でもよいのである。神戸の少年の殺人動機といい、方法といい、空虚な心から生み出した現代犯罪の極致とも言うべきである。現に、この殺人事件はわれわれに人間とはどんな存在なのか、人間という生物をどう理解すればよいのか、そして人間はどこまで残酷になり得るのかなどの問題を突きつけている。

この人間の悪への可能性について、後年泰淳はこう語っている。

自分は悪と無縁な弱者であると考えていたのはまちがいで、ことによると、研究と経験さえ積めば、悪を実行できる強者になれるかもしれないゾ、と思うようになった。人間の可能性なるものが、漠然とひろがって、アラビアお壺から黒煙とともに出現する巨人の如く、ぼくの前にたちはだかった。[17]

泰淳は二郎という人物を描くことを通じて、人間の悪の無限な可能性を鋭く問いつめている。そして、人間の本質的なものを浮かび上がらせることによって、日常的な人間存在の在り方にも戦争のもつ悲惨さや残酷さが潜まれているとわれわれに暗示しているように思われる。

五

終戦まで一年半ばかり、二郎は自分の殺人行為を〈真剣に思い出すひま〉がなく、終戦を迎えた。敗戦した日本が世界から審判されるという戦争裁判の記事を毎日のように読んでいた彼は、〈自分の罪が絶対に発覚するはずがない〉ことを知り、平然としていた。しかしある日、彼が愛し合っている婚約者鈴子との幸せの将来を思いめぐらしていた時、突然自分に射殺された老人夫婦のことを頭に浮かべ、〈あの老夫婦のように自分たちもなるのではないかという気持ちにギュッとつかまれ〉たのである。このように、二郎は、老人ときわめて類似した状況に未来の自分たちを二重写しさせることによって、自分の気まぐれで殺した老人の苦痛と恐怖を追体験できたのである。そして、鈴子への愛情という回路をへて、感情移入が行われ、それによって、老人がはじめて単なる「物」ではなく、表情のある一個の「人間」として、愛する家族と共に暮らす「人間」として二郎の脳裏に浮かび上がったと思われる。

鈴子への純粋な愛から、二郎は鈴子にすべてを打ち明けた。彼の告白は鈴子に予想以上の打撃を与え、二人の間にもはや愛は成立しないことが二郎には分かった。鈴子との関係の破綻によって、〈今や自分が裁かれたのだ〉と悟り、〈自分の手で裁いたのだ〉と思った。彼は鈴子を失うという〈致命的〉な悲しみから自分の犯した罪の重大さ、行為の残虐性に目覚め、〈いままでにない明確な罪の自覚が生まれている〉ことに気づく。こうして、二郎はやっと他者の悲しみを感知できる人間らしい感情を取り戻し、戦争による感情鈍麻から抜け出したのである。

ここで、四年前に通訳の仕事で知り合った永富博道さんのことを思い起こす。青年時代の永富博道さんは右翼の巨頭・頭山満に傾倒した右翼青年であった。一九三七年十二月の南京陥落後に、愛国学生連盟の南京現地訪問に参加し、南京大虐殺を目撃するとともに、自らも加わっていき、多くの中国人を殺害し、その暴戻たる行為から「閻魔大王」と呼ばれた。敗戦で現地除隊した後も、国民党の軍閥・閻錫山軍に加わり、人民解放軍と戦った。一九四九年四月に解放軍に逮捕され、中国で十三年の収容生活を送り、一九六三年に釈放され帰国した。帰国後、中国帰還者連絡会に参加し、生涯の後半は犯した罪の償いをするしかないとの決意のもとに、日本全国で証言活動を続けている。そして、一九九五年に娘の手伝いで、自分の戦争体験を綴った『白狼の爪跡』[18]と題した著作が出版された。

金沢の集会で南京大虐殺の加害者としての永富さんと被害者の李秀英さんが対面し、そして握手を交わした。その歴史的な瞬間を目にした私は、全身に電流が走ったように戦慄した。私の目には、被害者も加害者もごくごく普通な古希の老人にしか映らなかったのである。ため息をつきながら二度と振り返りたくない過去を悲痛な口調で語る老人を前にして、私は困惑した。なぜ、この一見慈悲に満ちた老人が戦争で、あれだけの暴戻な行為に狂奔したのだろうか。人間性というものはこんなにも脆くもか弱いものなのだろうか。

永富さんの話をお伺いすると、彼は戦犯で捕まった時、罪の意識が欠片もなかったという。しかし、自分が処刑されるに違いないと思い、自決をしようとした時に、「死にたくない、なんとしても生き延びたい。監獄の小さな窓から太陽を拝みたい、月を拝みたい。生きてこの空気を吸えることはどんなに幸せなんだろう」と、かえって生への執着が強まった。そしてその時に、彼がはじめて自分に殺された中国人たちの憤り、切ない思いに気付き、人間がこの世に生まれて生きているという命の尊厳性を意識し、自分の罪をひしひしと認識したという。

人間は最も弱い者の立場に身を置くことによって、はじめて弱い者の痛み、疼きを感じられ、人間同士は平等であることに気づくのである。永富さんも主人公の二郎も例外ではない。

二郎は罪を自覚することによって、自他の悲痛に対する無感覚から、感情の通った人間に生まれ変わったのである。自覚は自分自身を客観的に見つめる力であり、自覚を失うことは自分自身を失うことである。二郎は自分を失いたくなかった。だから彼は〈罪の自覚、たえずこびりつく罪の自覚だけが私の救いなのだ〉と思い、この唯一の救いが失われたら〈自分はどうなるか〉との不安が強まった。そして、自分が〈自殺もせず、処刑もされず生きて行く〉なら、唯一生きていくための〈よりどころ〉となるのは、この〈罪の自覚〉しかないと二郎は確信する。

ラルフ・ジョルダーノ氏が『第二の罪――ドイツ人であることの重荷』という本で、戦後のドイツ社会がナチスの犯罪と正面から向き合っていないことを強調し、ナチ時代の罪をドイツ人の犯

した第一の罪とすれば、戦後にその罪を自覚し償うことを怠ったのは第二の罪であると告発している。[19]

二郎は第一の罪を犯したが、自分の罪をどう償うか、そして償えるかどうかは別として、罪の自覚を常に抱いているため、彼は第二の罪から免れているのである。

鈴子を失う悲しみにより、罪を意識した二郎は〈自覚をなくさせる日常生活〉が待っている日本に帰るのをやめ、中国に留まり、〈殺した老人の同胞の顔を見ながら暮〉すという自裁の形を取った。彼は宗教などによる救済を拒否し、また、その罪を国に帰することもなく、〈日本人一人々々〉、〈自分々々〉としての罪を背負って生きる日々を選んだのである。

二郎の行為は〈余り潔癖でありすぎる〉[20]と感じられるが、彼にとって、こういう自裁の形は自分の良心を鎮めるのに辛うじて見つけだした唯一の方法である。自ら苦しみや罪を一切引き受けることで、感情の通った自分を取り戻し、自分への信頼、そして人間への信頼を取り戻そうとしたのである。

二郎の決断から、中国に対する戦争責任の一切を背負って、罪の自覚を戦後の〈日常生活〉の中で担い続けよう、把持しつづけようとする作家武田泰淳の決意が読みとれる。現に、当時泰淳と一緒に上海で敗戦を迎えた堀田善衛の証言によると、当時の泰淳自身も中国に留まろうとしたのである。

彼は引揚船が来る毎に、埠頭近くまで来て物陰からその引揚船が港を出て行くのを、いつまでもじっと見送っていたものであった。彼は引揚船が来る毎に必ず来ていた。その表情の、極端に暗く、かつどこかした妙な具合に明るいことは、彼の内心の葛藤の凄惨さを物語っていたと思う。（中略）彼においての事情は何一つ知らないのではあったけれども、当時の私としても、ああこれは「中国にとどまるつもり」でいるのだなとは、直感出来たのである。[21]

本当の生き方を求め、これから如何に生きていけばいいのか、この罪悪感を如何に受けとめていけばいいのか、それとも、罪などを忘れ、〈日常生活〉の中でふてぶてしく毎日の暮らしを送ればいいのか、と泰淳は深刻に悩んでいたと思われる。結局、泰淳は二郎のように中国に残ることで自覚を維持することにしなかったが、日本に戻ってから、彼はもう一つの自覚を把持する形を取ったのである。それは自分を書くことであった。

……拠りどころは自分を書くこと。いくら自分を書くといっても全部の自分を書けない。（中略）その中のある特殊な自分、たとえばそういう極限状態に置かれて動き出そうとしている人間、そういうものならいくらか書けるだろう。[22]

二郎は自己の存在を確かめるため、罪の自覚を守衛するため中国に残り、それを生きていくための〈よりどころ〉としたように、泰淳は〈自分を書くこと〉、〈ある特殊な自分〉をさらけ出すことを〈拠りどころ〉としたのである。書くことによって、絶えず内面の自分を凝視し、〈日常生活〉という日々の中で罪の自覚を把持するのである。

精神医学者野田正彰氏は、中国で残虐行為を行った旧日本兵への深い聞き取りを通じて、心を病んでいた彼らが罪を自覚することによって、自他の悲しみを十分に感知できる〈柔らかい精神〉を取り戻すまでの過程とその精神状態の分析を『戦争と罪責』[23]という著作にまとめている。〈私が罪の意識を問うのは、他者の悲しみにやさしい文化を創らなければ、平和はないと考えるからである〉と著者は言う。著作の中の「させられた戦争」ではなく、自分が「した戦争」と認識し、大和民族の一員ではなく、おのれの責任として、罪を背負って行こうと試みる人たちの身から、二郎、そして泰淳の面影を見て取れる。『審判』の最後に、鈴子のお父さんが言うように、〈方法はちがうが、みんな自覚を守りつづけようとし〉ているのである。

『審判』の中では二人の主人公が描き出されている。滅亡観念という鎮痛剤で敗戦から与えられた屈辱や罪意識紛らわす杉と〈自分だけが持っている特別ななやみ〉に執拗に拘る二郎である。杉と二郎は対照的な立場にありながら、武田泰淳の持つ両極の二面であり、内心での葛藤を反映しているのである。

『審判』を出した翌年（一九四八年）に、「私を求めて」というエッセイで、泰淳はこうも語る。

私を描きつくすために私が生きている。そのような私至上の作家の生き方は、たしかに作家らしい生き方であるにちがいない。（中略）私が真に作家としての私として存在するためには、私は「私」を書くこと、書きつつあること、書きつづけるであろうことを止めるわけにはいかない。（中略）作家が自己の生み出した多数の「私」にとりかこまれている姿は、福々しい老翁が多数の子孫にとりまかれている状態よりは、全身の傷口からはい出した蛆を自ら眺めている負傷者の形に似ているかもしれぬ。おそらくは作家は、自己の作品中の「私」たちから、この負傷者の感ずる如き戦慄をうけとるであろう。しかしその戦慄によって、彼はふたたび目をひらき、腰をもちあげ、重き手をとりあげて、彼の苦しいいとなみをつづける。そしてその彼のいとなみを最後まではげまし、強くひきだし、見守るものは、彼の傷口から生れた「私」たちなのである。「私」とは、作家にとって、それほど運命的なものなのである。[24]

この『審判』の二人の主人公こそ、泰淳がさらけ出した〈ある特殊な自分〉であり、彼の身体の傷口から〈はい出した蛆〉である。〈私〉を書くことを止められない、自分の傷口から生まれた〈私〉たちを戦慄しながらも眺めている武田泰淳にとって、作家という職業はいかに運命的なものであるかがわかる。ある種の「業」さえ感じずにいられない。

六

武田泰淳は中国での戦争体験と敗戦体験によって、自分自身をも含む人間に対する信頼が失われ、まさに〈生き恥さら〉す渦中

に投げ込まれるような状態であった。しかし、この屈辱と敗北の体験は、泰淳にとっては、同時に新しい自分、新しい生き方を発見する機会でもあった。彼はその〈恥じらい〉と罪への自覚を保有して、それを文学の原動力と化した。

一九四五年八月十五日を境にして、文学者の文学についての姿勢や考え方が大きく変化した。中には、一夜にして軍国主義者から民主主義者に変わり、戦争中に書いたものと戦後に書いたものはかなり落差が見られている作家もいる。彼等の多くは自己を隠蔽したり、あるいは徹底した自己分析がなく、安易な懺悔で過ちを葬り去ろうとした。だが、〈戦後の作家は自分の潔癖性を信じられないところから出発している〉[23]と断言している泰淳はその時代の大勢に便乗しなかった。彼は世間の人たちの変わり身の速さ、世知に長けた処世術に立ち向かうように、内なる醜悪な「私」を書き続けることを自分の文学の出発点、そして生きていくための〈よりどころ〉としたのである。

戦争に巻き込まれる個人、歴史に翻弄される個人、これは武田文学の大きなテーマの一つである。戦争は個人を容赦なく巻き込んでしまう巨大な力があるが、泰淳は決してこうした個人の行為を戦争や歴史の責任に帰らせ、集団に個人の罪を隠蔽したり、埋没したりはしない。歴史の変遷や、時代の移り行きがあっても、個人の罪、一人々々の罪は澱みのように心の底に沈んだまま、忘れようといかに努めても、記憶から消えることがない。〈自分だけが持っている特別ななやみ〉に固執する二郎のように、内なる醜悪な「私」を書き続ける泰淳もまた「個」の問題として、個人として戦争への係わりを問おうとしたのである。こうした戦争、悪に対する責任の自己認識に武田文学の独自性がある。

しかし、泰淳が作品に託して言っているのは、決して過去の特殊なある時期における出来事だけではない。戦争などの極限状況はわれわれの日常生活から切り放されていない。人間の生死のスイッチを握ることに全能感を得ようとした神戸の少年の心理は、半世紀前の二郎を含む数しれない兵士たちの〈人を殺すことはなぜいけないのか〉、人間の尊い命を絶つか絶たないかはすべて自分の〈心のはずみの一つにかかっている〉という無感覚さに酷似している。泰淳の文学に貫いている〈恥じらい〉と〈罪の自覚〉は、彼の魂の奥底から発せられた、無感覚状態に落ち込みつつある現代人への警鐘であろう。

注

(1) 朝日新聞社・一九七三年三月三十一日
(2)『未来の淫女』自作ノート・一九五三年五月・目黒書店刊
(3) 中野好夫「作家に聴く・武田泰淳・「文学」、一九五一年五月
(4) 堀田善衛との対談「現代について」・「文学界」、一九五三年七月
(5)『青年の問題文化の問題』・合同出版社・一九六七年九月
(6) 埴谷雄高との対談「軍隊と文学的出発点」・全集別巻二・一九七〇年十一月

(7)「対談・二十年後の戦後派」・「群像」一九六五年八月
(8)「滅亡について」・「花」第八号・一九四八年四月
(9)対談「戦後作家は語る」・「図書新聞」一九六九年十二月十日
(10)伊藤博子「『審判』論」・「方位」三・一九八二年十一月
(11)「月刊キリスト」・一九六八年一月
(12)「群像」一九六五年八月
(13)根岸隆尾「武田泰淳論—苦悩する〈存在〉」・「評言と構想」一九七七年四月
(14)「わが思索わが風土」・「朝日新聞」一九七一年三月十五日～十九日
(15)臼井吉見との対談・『太宰治全集』第八巻月報、一九六七年十一月
(16)「無感覚なボタン」・「文芸時代」一九四八年五月
(17)「ぼくと上海」・「日本読売新聞」一九五七年四月五日
(18)『白狼の爪跡』・新風書房、一九九五年八月
(19)小林恵二訳・ヨルダン社、一九八二年一月
(20)兵藤正之助『武田泰淳論』・冬樹社、一九七八年五月
(21)堀田善衛「彼岸西風—武田泰淳と中国」・「世界」一九七七年六月
(22)武田泰淳「私の創作体験」・『現代文学と創作方法』、新評論社・一九五四年八月
(23)岩波書店・一九九八年八月
(24)「私を求めて」・「文芸首都」一九四八年八月
(25)座談会「切実なる者、今日の文学者」・「潮」一九五二年十月

(ハク・ヨウ　本学大学院博士後期課程)